昭和二十五年三月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通第十三號）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈光

第二卷・第四號

目次

正信念佛偈意譯……白井成允（1）
思い出ずるまゝ……丸尾猪太郎（7）
解信より仰信への經路……出淵勝郎（10）
臨終間近き母の病床に……竹内幸子（13）
はべりて

正信念佛偈意譯

白井成允

正信偈　しんじんのうた

一。（歸敬序）

(1) 帰命無量壽如來　南無不可思議光

(1) はかりなき　おほみいのち　よ、
おんめぐみ　つきぬ　みほとけ、
おもひえぬ　おほみひかり　よ、
おんさとり　くしき　みほとけ、
おんみ　に　ぞ　われら　ひたすら
よりまつり　たよりまつらふ。

二。彌陀章（依經段）

(2) 法藏菩薩因位時　在世自在王佛所　觀見諸佛淨土因　国土人天之善惡

(2) おんみ　は　も　とはの　いにしへ、
ほつしやうの　おんみやこ　より
ホフザウ　と　なのり　いでまし、
おんをしへ　ネウワウぶつ　に
こひまつり　つかへたまひて
もろもろ　の　みほとけたち　の
きよらけき　くにぐに　の　さま、
その　おこり、その　くにびと　の
よき　あしき　みそなはしつゝ、

建立無上殊勝願　超世希有大弘誓　五劫思惟之攝受　重誓名聲聞十方

(3) 普放無量無邊光　無礙無對光炎王　清淨歡喜智慧光　不斷難思無稱光　超日月光照塵刹

こよなく　も　すぐれたまへる
おんねがひ　たてたまひて　は、
まれらなる　おんちかひ　をば
よ　に　こえて　おこしたまひつ、
ひさしく　も　これ　を　かんがへ
すゑ　つひに　これを　なります、
もの　みな　の　つひに　やすらふ
くしき　みな、なむあみだぶつ、
たぐひなき　さとり　の　みくに。
かさねて　ぞ　ちかひたまはく、
わが　みな　の　よ　に　くま　も　なく
ひゞきゆき、きこえゆかむ　と。

一彌陀成佛の果德一

(3) あまねく　も　ひかり　はなたす。
その　ひかり、はかり　も　あらず、
ほとりなく、さえらるゝなく、
たぐひなく、ほのほ　の　わう　と、
てる　ひかり、きよら　の　ひかり、
よろこび　の、さとり　の　ひかり、
たゆるなく、おもひ　をも　こえ、
ことば　をも　はるかに　はなれ、
ひ　も　つき　も　かくるゝ　ひかり、

かくのごと くしき ひかり を
かず しらぬ くにぐに に すむ
ありとある いのち の たぐひ
ひとしく も かうむりまつる。

「衆生往生の因」

(4) 本願名號正定業
至心信樂願爲因

(4) ミダぶつ の もとつねがひ の
みな こそ は、きく ひと を して
まさしく ぞ きよき みくに に
いらしむる くしき みわざ ぞ。
その みな を まごころ を もて
しんぜしめ むかへとらむ の
おんねがひ ましませば こそ。

「衆生往生の果」

(5) 成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

(5) ここ に して みほとけたち に
たぐふべき とく を たまはり
する つひに おほき さとりを
さとる こと、げに ミダぶつ の、
ありとある いのち ことごと
みさとり に いたらしめむ の
おんねがひ なりませ ば こそ。

三。釋迦章 —總勸—

(6) 如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海

(6) シャカによらい よ に いでましし
ゆゑ は ただ アミダほとけ の
おんねがひ ときまさむ と ぞ。
にごり みつ あさましき よ の
もろもろ の いのち の たぐひ、

應信如來如實言

(7) 能発一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃

(7) おんまこと うけて よろこぶ
まごころ の おこる とき し も
ぼんなう を たゝず すなはち
ねはん を ば わかたせたまふ。

(8) 凡聖逆謗齊廻入

(8) いきしに に まよふ ひとびと、
さからひて くるふ どもがら、
みのり すら そしる たぐひ も、
たかき みち はげむ ひじり も、
おのおの の こゝろ くだけて
みほとけ に たよりまつれ ば、
もゝ の かは うみ に いる とき

如衆水入海一味

(9) 攝取心光常照護
已能雖破無明闇
貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞実信心天

(9) あぢはい の ひとつ なる ごと、
ひとしく おなじ さとり の
おんめぐみ たらひて あゆむ。
みすくい の ひかり は つねに
てらしつゝ まもりおはせ ば、
すでに よく むみやう の やみ を
やぶりまし、やみ は はれれ ど、
むさぼり の、いかり、にくみ の
くもきり は たえま あらせず
しんじん の そら を おほへり。

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇

されど いま ひ の ひかり はや
てりぬれ ば、くもきり の した
あきらけく やみ なき ごとし。

明如來本誓應機

(10) 獲信見敬大慶喜
卽横超截五惡趣

(10) しん を えて うやまひまつり、
おほらかに よろこびぬれ ば、
すなはちに あしきさかひ を
こえはなれ、とはに かへらじ。

(11) 一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

(11) およそ よ に いける ひとびと、
よき、あしき かはり も あらず、
ミダぶつ の ひろき ちかひ を
きゝまつり、しんじまつれ ば、
ほとけ みな いたく よろこび、
すぐれたる さとり の ひと ぞ、
しろはちす、たへなる はな と
なづけまし、ほめしめたまふ。

「結誡」

(12) 彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

(12) ミダぶつ の もとつねがひ ゆ
なりましゝ くしき みな を ば、
よこしま の おもひ に けがれ
たかぶれる あしき ひとびと、
よろこびて うけまつる こと
かたき かな、かたき きはみ ぞ。

(依釋段)

四。總讃

(13) 印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意

(13) にし の かた インド の ろんじ、
チウカ また ヒノモト の ほつし、
シャカぶつ の よ に いでましゝ
みこゝろ を あらはしまつり、

ミダぶつ の もとつちかひ の
もろびと に かなへる こと を
あきらかに しめしたまへり。

五。龍樹章 —別讃—

「緣記」

(14) 釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見

(14) シャカによらい レウガせん にて
もろびと に のらせたまはく、
リウジュぼさつ みなみインド に
いでたまひ、ことごとく よく
あり と とき、なし と あらそふ
よこしま の おもひ を くだき、
だいじやう の こよなき みのり
のべときて、つゆ しりぞかぬ
よろこび の くらゐ を あかし、
やすらけき くに に うまる と。

「論意」

(15) 宣說大乘無上法
證歡喜地生安樂

(15) ゆきがたき くがぢ の なやみ
あらはして けふの われら に
ゆきやすき ふなぢ の たび を
しめして ぞ たのしませます。

(16) 憶念彌陀佛本願
自然卽時入必定

(16) ミダぶつ の もとつねがひ を
たまのを の ふかみ に うけて
きゝまつる その とき はやく
おのづから とは の さとり に

唯能常稱如來號　　いたるべき　み　と　は　さだまれ。
應報大悲弘誓恩　　たゞ　つねに　なむあみだぶつ
　　うけまつり　となへまつりて、
　　はかりなき　おんあはれみ　ゆ
　　なりましゝ　ひろき　ちかひ　の
　　おんめぐみ　こたへまつらむ。

六。天親章

「造論自帰」

(17) 天親菩薩造論說　　(17) テンジンぼさつ　じやうど　の　ろん　を
帰命無碍光如來　　つくりまし　とかせたまはく、
　　さはりなき　おほみひかり　の
　　みほとけ　に　たよりまつる　と

「一論所明」

(18) 依修多羅顯眞実　　(18) シャカぶつ　の　みこと　に　よりて
光闡横超大誓願　　おんまこと　あらはしたまひ、
　　よこさま　に　とく　まよひぢ　を
　　こえしむる　おほき　ちかひ　を
　　かゞやかに　あかしたまひつ。

(19) 廣由本願力廻向　　(19) くはしく　も　もとつねがひ　の
爲度群生彰一心　　みちから　の　めぐみ　に　よりて
　　もろびと　を　すくはむ　ために
　　いつしん　を　あらはしたまふ。

(20) 帰入功德大宝海　　(20) おんくどく　みちたる　うみ　に
必獲入大会衆数　　つゝましく　いりまつる　とき、
　　かならず　や　きよき　みくに　に
　　ゆく　ひと　の　かず　に　つらなり、

得至蓮華藏世界　　はちすばな　きよき　みくに　に
卽證眞如法性身　　いたる　とき　すなはち　しんによ
　　ほつしやう　の　おんみ　を　さとり、
遊煩惱林現神通　　ぼんなう　の　はやし　に　あそび
　　じんづう　の　ちから　あらはし、
入生死園示應化　　いきしに　の　そのふ　に　いりて
　　おうげ　の　み　じざいに　しめす。

七。曇鸞章

「事蹟」

(21) 本師曇鸞梁天子　　(21) リョウ　の　わう、ドンランだいし　を
常向鸞處菩薩禮　　ぼさつ　と　ぞ　うやまひましゝ。
三藏流支授淨教　　ボダイルシ　きよき　をしへ　を
焚燒仙經帰樂邦　　ドンラン　に　さづけまつれ　ば、
　　せんにん　の　ふみ　は　やきすて
　　あんらく　の　くに　に　ねがひつ。

「論の解釋」

(22) 天親菩薩論註解　　(22) テンジン　の　ろん　を　あかして、
報土因果顯誓願　　ミダぶつ　の　きよき　みくに　は
　　ゆく　たね　も　ひらく　さとり　も
　　みちかひ　に　いづ　と　あらはし、
往還廻向由他力　　ゆく　も　また　かへる　も　なべて
正定之因唯信心　　みほとけ　の　みちから　ゆゑ　ぞ、
　　おんさとり　かならず　うべき
　　たね　は　たゞ　しんじん　ひとつ、

(23) 惑染凡夫信心発　　(23) まよひきつ　けがれゆく　ひと
　　しんじん　の　ひらくる　とき　ぞ

證知生死卽涅槃　　いきしに　を　ねはん　と　あかし、
必至無量光明土　　はかりなき　ひかり　の　くに　に
　　かならず　や　いたり、すなはち、
諸有衆生皆普化　　もろもろ　の　まよひさすらふ
　　いのち　みな　すくふ　と　のらす。

八。道綽章

「開顯法義」

(24) 道綽決聖道難證　　(24) ひじりみち　さとりがたし　と
唯明淨土可通入　　さだめつゝ、ドウシャクぜんじ
　　たゞ　きよき　みくに　の　みち　ぞ
　　ゆくべき　と　あかしたまへり。

(25) 萬善自力貶勤修　　(25) もろもろの　よき　わざ　とて　も
圓滿德號勸專稱　　みづから　の　ちから　と　おもひ
　　つとむる　を　おろか　と　しめし、
　　まどかなる　たふとき　みな　を
　　ひたすらに　となへよ　と　のる。

「勸信顯益」

(26) 三不三信誨慇懃　　(26) しんじん　の　あつく、きよけく、
像末法滅同悲引　　つね　なる　を　ねごろに　をしへ、
一生造惡値弘誓　　みちびけり　みち　なき　よ　まで。
至安養界證妙果　　しぬる　まで　あく　を　つくれ　ど
　　みちかひ　に　まうあひぬれ　ば、
　　やすらけき　みくに　に　うまれ、
　　さとるなり　たへ　の　みさとり。

九。善導章

「開顯佛意」

(27) 善導獨明佛正意　　(27) シャカぶつ　の　ふかき　みこゝろ
　　たゞ　ひとり　ゼンドウだいし

矜哀定散與逆惡　　あきらかに　しめしたまひつ、
光明名號顯因緣　　よき　わざ　に　はげむ　ひと　をも
　　あじき　わざ　くるふ　もの　をも
　　おしなべて　あはれみたまひ、
開入本願大智海　　みな　の　ちゝ、みひかり　の　はゝ、
　　いんねん　の　ふかき　めぐみ　に
　　しんじん　を　えしむ　と　しめし、
　　ミダぶつ　の　もとつねがひ　ゆ
　　なりましゝ　さとり　の　うみ　を
　　ひらきて　ぞ　いれしめたまふ。

「獲信利益」

(28) 行者正受金剛心　　(28) その　うみ　に　いりぬる　ひと　は
慶喜一念相應後　　こんがう　の　しん　を　いただき、
　　よろこび　の　おもひ　さやけく
與韋提等獲三忍　　みねがひ　に　かなふ　とき　し　も、
　　キダイケ　と　こゝろ　ひとしく
卽證法性之常樂　　よろこび　と　ちゐ　と　まこと　の
　　とく　を　えて、すなはち　つひに
　　ほつしやう　の　とは　の　たのしみ
　　あかす　と　ぞ　のらせたまへる。

十。源信章

「開顯法義」

(29) 源信廣開一代教　　(29) シャカぶつ　の　ひろき　みをしへ
偏帰安養勸一切　　うちひらき　ゲンシンそうづ
　　ミダぶつ　の　やすけき　みくに
　　ひとへに　ぞ　あこがれおはし、
　　もろびと　を　すゝめたまへり。

「專雜得失」

(30) 專雜執心判淺深　　(30) ひたすらに　みな　を　となふる

こゝろ　こそ　げにも　ふかけれ、
ほか　の　わざ、そへまじふる　は
あさし　とぞ　しめしたまひて、
とこしへの　さとり　の　みくに、
たまゆらの　かりの　みくに　を
まさしく　も　いひひらかせり、

「顯示妙益」

(31) 極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我

(31) きはまれる　つみ　の　ひと　は　も
たゞ　みな　を　となへまつらな、
われ　も　また　かの　みほとけ　の
みすくひ　の　なか　に　あるなれ。
ほんなう　に　まなこ　さへられ
みひかり　を　みず　と　いへども、
みほとけ　の　おんあはれみ　は
うむ　ときも　なくて　わが　み　を
とこ　てらし　てらしまします。

十一。源空章　「開宗弘化」

(32) 本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗敎證興片州
選擇本願弘惡世

(32) シャカぶつ　の　をしへ　あまねく
あきらめて　ほんしゲンクウ、
よき　あしき　ひとびと　すべて
あはれみつ、この　しまぐに　に
しんじつ　の　をしへ　を　ひろめ
ミダぶつ　の　えらびえらびて
たてまし、　もとつねがひ　を
あしき　よ　に　ひろめたまへり。

「信疑得失」

(33) 還來生死輪轉家

(33) いきしに　の　まよひ　の　さと　に
さすらふ　は　うたがひ　の　ゆゑ、
決以疑情爲所止
速入寂靜無爲樂
おんさとり　しづけき　みやこ
かならずや　とく　いりぬる　は
必以信心爲能入
しんじん　の　みち　ひとすじ　ぞ。

(結　勸)

十二。

(34) 弘經大士宗師尊
拯濟無邊極濁惡

(34) みをしへ　を　ひろめたまへる
ひじりたち、よ、　つぎつぎ　に、
にごり　みつ　あしき　きはみ　の
つみびとら　きはみ　も　なき　を
すくはむ　と　いそしみたまふ。

(35) 道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

(35) いざ　さらば　よ、　の　はらから
つたふる　と　つたへらる、　と
あひかなひ、こゝろ　ひとつ　に
ひじりら　の　この　みをしへ　を
ひとすじに　しんじまつらむ。

正信念佛偈は、祖師親鸞聖人が御著敎行信證において一大聖ノ眞言ニ帰シ大祖ノ解釋ヲ開シテ佛恩ノ深遠ナルヲ信知シテ作ルーと仰せられて記したまふ所ータダ念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラスルー淨土眞宗の敎義と傳統とを、深き敬念において約め述べてをられる。蓮如上人以來眞宗門徒の朝夕佛前に禮誦しまつる偈文として、常に吾等の信行を育ぐんでいたゞいてきたこと云ふまでもない。今此の聖偈を和語に譯したてまつる。偈恩の深遠なるに謝し奉らんとである。たゞ私の領解の淺きを以て徒に此の聖語を弄ぶの罪はもとより之を一身に負ふ。若し、或は斯偈の讃歎信受の緣たることあらば、其の幸慶を顯冥無量の諸佛諸菩薩の御加護に感謝し奉らう。

昭和廿四年二月廿二日太子忌の朝　洞華室にて　成允識

思い出ずるまゝ

丸尾猪太郎

近角先生は、愛山護法の権化とも云う可き先考を父として生れ、其感化敎養によつて生い立ち、宗門のために學問をなし、宗門のために苦しみ、其苦しみによつて信仰に入り、其感恩の至情は、宗門護持の大理想となつて、明けても暮れても、この宗門と云うことが念頭を去らない、困難辛苦は少しも意に介しない、其理想達成への行動が一代の奮闘となつていられたのである。

先生が有緣の求道者に対し、如來の清淨本願を强調して、烈火の如く徹底せずば止まなかつたのは、一世尊の大慈悲は衆のために苦行を修し玉うこと、人の鬼魅に著はされて狂亂して所爲多きが如きに、如來の絕對態度に對し、先生としては、從容迫らざる如き消極的態度を以て、求道者に接するわけには行かなかつたのである。これ私共に対し、活ける聖人の代表者となつていて下さつたのである。

先生口を開き筆をとれば、必ず先ず聖德太子親鸞聖人の感恩に始められる。聖人の人格を讃嘆せらるるや、聖人の偉大なるは、他の偉人と事かわりて、非凡の行跡のあらせられたことではない、吾人の仰ぐところの聖人の偉大は、聖人の絕對信であると屢これを物語つていられた。

先生が清澤先生に對し、痛く感動されたのは、清澤先生が瀕死の病軀を提げて、宗門革新の大事業の爲に、仆れて尙止まなかつたは、全く如來大信の現われであると禱慕されたのである。

「求道」時代の近角先生は、私たちに、先生が多年研究された學問、深遠なる佛敎の敎理、乃至眞宗の敎學、是等序論的言論は一切仰せられない。驀直に、佛法の由て起つて來た根源、即ち如來の絕対清淨本願「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり」、この苦惱に惑溺して、一點明るみのなきこの私を、救濟せずば止まないと、起ち玉える如來の親心を徹倒せしめずば止まない、殆んど形容の出來ない熱烈の態度を以て、私に迫り之れを知らしめ下さつたものであつた。先生の求道誌上の七里師追懷のところに「七里師につきては、私は一向ありがたい珍らしい事もない。きく話もきく話もおなじ事ばかりかいてある。要するに御慈悲を喜べと云うことのみ繰り返しての仰せで、何うも信の一念と云う點が少い、ごく手輕で、御報謝せよという事やら、心を入れて聽聞せよと云うだけの樣である。私はそれとさかさまで、信の一念の處だけ申す、御恩報謝も此の信仰に入りての後の事と、少しもすすめぬ、もし信仰にさえ入れば、御相続は必ず出來ると、丸で七里師とは逆である。ソコデ私は思うには、私は一念というが、私の言う一念は、何もむつかしい事でない、頂く頂かんと骨折ることではない、七里師がこの信の一念を申されぬと云うはつまりあまり人が一念の處に骨折る故、何も他はない、唯南無阿彌陀佛ばかりと

七里師はごく平易に申されたのである。即ち同師は云わずに居られるが、つまり私の言うのと結局は同じなのである。安心したい、信を得たいと云うが如來様の不思議である、如來様が眞実にして下さる親様御苦勞御慈悲は私の爲と、かく聞かして貰う他に何を頂くのか云々」先生は「求道」時代に於て私たちに、信の一念に力を入れて是のみを説かれたが、後年「信界建現」に至つて、恰も一線を引きて之れを劃せられたように、信後に於ける後念相続を仰せられた「絶対信仰より來る人生經營」を毎号強調せられた。之れは恰も帰洛後の聖人があの漂泊の御境遇に於いて、現生利益和讃を書かれたと同様で、常人なれば其不遇を悲しまる可き筈なるに、先生は其反對に多年の病狀に於ける述懐は、絶対信仰の徹底には潑剌なる眞実の人生經営の実現せぬことはないとの確信を述べて現在の境遇に於いて佛恩を喜んでいられた。

近角先生は性素撲恬淡、一宗門の僧侶たるに甘んじていられた。何事にも隱忍自重の消極的態度を取らるるに反し、他に向つて自己の責任を自覺するときは、堅忍不拔驚く可き大積極的態度を以て、必ず之れを成し遂げずば止まれなかつた。

「信界建現」の言論は意義頗る深遠、私らは再三熟読咀嚼含味、初めて先生の眞義を伺い得る。何人たりとも、如何なる境遇にあつても、一度、如來大悲の一念に氣付かせて頂く時は、先生の仰せらるる絶對信の徹底によつて眞実の人生を建設し得ることの確信と、尚且つ其體驗をなさずにはいられぬ。

私は私の信後生活に於いて、帰洛後の聖人、病狀に於ける近角先生を偲び、大に反省せねばならぬと覺悟しながら、いつしか後戻り、後戻り、大悲の佛恩を忘れ勝ちとなる。常住の先生は斯くの如き、懈怠なる私の信後の生活に、「信界建現」を以て、偉大なる訓戒と策勵をお與え下さるのである。

近角先生は「信界建現」第四十号に、絶対呵責、絶対軟語の文字を使用されてある。佛の態度そのまま、先生はこの二面の態度を以て、私を導きて下さつたのである。

私は先生御病床十年の久しき、此間一回だも御見舞申上げることが出來なかつたのである。後より之を考えると、御伺いの出來ない事はないと悔恨の念に堪えないが、其當時の私としては東京に行けない業縁に束縛されていたのである。先生はまだまだ御存命下さることと思いつつ、時機を延ばしていた。

折々上京の同朋には必ず私の起居安否をお尋ねになる。先生は私の身上をお氣遣い下さつて、屢不自由なる御腕を動かせて、御慰撫の要を認め送り届けて下されるのであつた。

先生は昭和十三年春彼岸、突如百三十字の歎異抄第十六條の結文を書きて贈つて下さつた。當時先生の眞意は判らなかつたのであるが、後日某氏から「先生は君が昨今の失意を非常に心配しいられる」と云う話をききて、初めてこの長文の揮毫を贈つて下さつた御親切が判つて私は感激に堪えなかつた。

先生は亡妻が如來の大悲に驚き、絶対信に入つてめいもくしたことを聞かれ大にお喜び下さつた。私が「妻の入信」を書きてお目にかけたところ、何にも仰せられぬ。ただ、「私が悪かつた」と云うことに目を付けられ、「まあ丸尾自身が悪かつたと、氣が付いたところはよかつた」と某氏に談られたそうである。

先生御往生の年の春、吹雪菲々として空を飛ぶ、きわめて寒き日であつた。私は亡妻納骨の爲に、大谷本廟に詣で、偶然御參詣の句佛上人にお遭い出來た時、上人は「今日は親戚に先約があつて、其方に行かねばならぬ、明日は半日を明けて置くから、是非訪問して呉れ」と何だか私如き者の話をお聞き下されたげな御態度であつた。甚だ遺憾ではあつたが其翌日は、御伺いの出來ない日であつた

から、厚く御高意を謝して辞去した。このことを書信で先生に申上げたら、かねて宗門のことを御心配していられた先生は、これを非常に御喜び下さつたと奥様からお便りがあつた。

昭和十七年四月十日大坂中之島公會堂に於ける近角先生追悼會の席上、近角常晋先生の述べられた御感想のうちに左のお話があつた。

隨分古い話ではあるが、茲に來ている丸尾君が煩悶求道して、兄の話を聞いていたが、兄の話が丸尾君にはどうしても判らない、兄は丸尾君が判りませぬの一點張りだから、ますます苛ちて熱心の度は高まつてくる。丸尾君は頗る窮している、私も之れを傍で見兼ねて、一日兄に向い、「あなたは熱心に丸尾君に話されるけれど、まだ丸尾君にはあなたの話が判らないで苦しんでいる。判らない丸尾君に、何程やかましく云つたところで、仕様がないじやありませんか」と注意すると、兄は暗い顔をして「丸尾が是れ一つを聞くために、態々國から出てきて、今これが判らずに、空しく國に帰るのを、若しわしが捨て置けば、彼に再び大悲に氣付く時節があると思うか」と激語されたそうである。

常晋先生は数十年前の私の一事をよく記憶していられたと私は大に驚いた。近角先生の熱烈なる御眞実は、恰も曠却以來聲を嘆らしてお呼びかけ下された、大悲の親の狂亂所爲多きが如き絶対態度其儘であつた。

是れは第三回宗教法案提出のときのことであつた。いよいよ貴族院提出が明日の閣議で決せられることとなつた、私は之を聞いて帰つて先生に報告した。すると其時先生は、俄かに相好をかえて私に云わるるには「君はなぜ某氏から其話を聞いた時言下に、明日の閣議にて貴族院提出を否決するよう、御盡力を願うと頼み其結を取つて帰つてこなかつたか」と烈火のようになつて私をお叱りになつた。

傍の某氏が之を聞き兼ねて「失禮ながら丸尾君の力では閣議を阻止し得られるとは思えません、今之れを丸尾君に求めるのはチト無理ではありませんか」と。先生之れを遮つて「閣議を動かす覚悟なきものが何で某氏を訪問しましたか、今日の場合微力とか有力だとか、そんな事を考えて辟易していられますか」私は低頭沈默手に汗を握つていた。

後刻計らずも前庭にて先生に出で合つた、先生笑いながら「丸尾君先刻はチト厳しすぎたね」と云われ、私は「先生申訳がありません」と頭を下げた瞬間、恰も茫然自失していた私が、ハット打ち驚きて振りかえつたように、俄かに意氣昂然としてあがり、大なる勇氣が勃々として湧き出て來た。

往事夢の如し、先生御存命の昔を偲びて感慨無量である。聖人となり、恩師となり肉身となつて多生曠却憐れみ、御苦勞下さつた大悲の鴻恩を思つて私は泣いて大いに之れを感謝せずにはいられないのである。

解信より信仰への經路

出淵勝郎

省れば不可思議の因緣により往年私が台湾に在勤当時いろいろの人生苦に直面してその解快を求めて、哲學や宗教の書を翻いていた頃、偶々山下氏に会う機会を得て、氏が多年淨土眞宗の信仰に生きられて居たのを承り、佛教就中淨土眞宗に帰することが問題解決の捷經であると知り、一路その道に進んだのであります。当時氏に会つたことが後年解信より仰信に到達せしめられる端緒になつた事を偲んで深く氏を德とする次第であります。

私の仰信に到るまでの經路は「救われるまで」と題して京都の興教書院から大正十二年に發行して頂きましたからその委細は同書に譲りますが、山下氏との会見は生涯の私の方向を決定した大きな課題となりました。

其後哲學、科學、基教、佛教等の書を読みつづけましたものの、内心の空虛は依然として残り、諸先輩の懇切な指教も空しくいつまでも心の物足らなさをかこつて居りました。それに性來の研究癖に跳らされて多讀多聞を続け、台湾を引上げて上京し、再び研究に沒頭いたしました。

齊藤唯信博士著の「他力信仰の極致」の自序に「信仰に解信と仰信とがある。解信は研究的解知を先として信仰に入るもの、仰信は自已の智識を本とせず愚痴にかえつて信仰に入るもの、此二者は形式に於いて差別はあるが、解信は遂に仰信に一致する。予は若き時代より研究室にこもつたもの故解信から仰信に入つたものである。嘗て西行法師が伊勢大廟に參拜の時、何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝと詠じた如く、予の淨土教における信念もまた其の如くである」とあるのを拜見するにつけ、先づ解信こそ仰信に到る道であると思い、一心に解信へと志したが、偶々芝原玄超氏の「念佛に生きる」の書の一節に「ただよき人の仰せとのみ鵜呑みすることは不可能で、佛の実在、靈魂問題、地獄極樂の解快が大切である、これが入信の基礎問題である云々」とあるのを讀み、又してもそうした問題の研究に頭を突込みました。然し私の經路から考えますと芝原氏の靈魂、如來、淨土の問題の解決の困難さは、「よき人の仰せを鵜つて信ずる」困難さ以上であります、如何に巧妙に説明してあつても一應の理解は出來てもそれ以上は出られません。これ等の問題は三世を一貫する生命の救済主なる如來の問題の解決に帰するに外ならず、如來実在の問題一が誠に先決問題であると思うのであります。私も現に求道途上に於て果して彌陀佛が存在し給うか否かとの根本問題に行きつまり、一歩も前進出來ぬ陷穽に落ち込み長い間苦しみましたが、早く佛を認めたい、摑みたい、これが明らかに證明されれば直に信じ得るものをと五里霧中に漂いつつある方が多いと思います。

私はそこで阿彌陀佛に関する著書をあさり初めました、列擧しますれば、

齊藤唯信師著、阿彌陀佛總論。加藤智學師著、阿彌陀佛の研究。西谷師著、如來と衆生との交渉。金子師著、佛。島地師著、佛陀論。村上專精師著、佛陀論。普賢大圓師著、如來論。久松眞一師著、眞佛の実在。矢吹博士著、阿彌陀佛の研究等々

これ等を讀み一應如來に関する知的理解は一通りついた積りでありますが、解信だけでは到底滿足出來ませんでした。就中倉田百三氏著「法然と親鸞の信仰」中にある歎異抄解説の一節に「彌陀の誓願不思議というものは何處から來たのか、これは信者にとつては湧き出たもの、無から生じたもの、第一原理である。吾々の心が出したものでない、初めからあつたものである。吾々は何故に疑わぬか、そういうものがあるかないか、誠か嘘か、つくり話でないかということを何故取調べて見ようとしないのか、吾々より先にあつたものだからだ。それは疑うことを許されない、第一原理であるからである。疑うを要しないもの、突然的無條件的臨在なのだ、これ以上は私も色々というても仕方がない。解る機緣の來たものには解るし、そうでないものには雲を摑むような話である云々」とありましたのは私に最も深い理念を與えてくれたのであります。然し何時までも他人の説明を讀み客觀的に如來を発見せんとする心のやまぬ私は幾多先覺者の教をきいても、その様になり得ない私の愚昧に氣づかず、徒らに外に向うてのみ心を向けて他力の大悲を自分で空しく探索するのみで我が身の憍慢さを悟らず、いよ〳〵求めればいよ〳〵窮し、結局人間の知識や分別でわからないのだ、如來の智慧は不可思議なのだという處に落ちつかせて頂き、始めて大安心を惠まれると同時に如來の実在を確信し奉る事になつたのであり、言語や思慮を離れ、無義爲義の大慈悲尊にまします事が疑えなくなつて、始めて心内が充足しました、いうことなしの大幸福を頂く事になりました。

全く外にのみ求めて居た私の眼を内に向け改めて自已の眞相を見出し、又人生社會の実相を諦觀するに到つて、人生の矛盾、分裂、邪悪、不幸、苦悶の地獄、修羅場を知り、更に死の前に人間の理性も知能も全く無力無能全く施すに策のない、人間存在の絶望的限界を自覺させられるに及び悲泣雨涙するばかりでありました。その瞬間

一條の綱より外に頼みなし
千尋の崖に落つる我が身は

と、不思議にも天籟が聞え天啓に接しさせて頂いたのでした、とめどなく念佛が流れて下さいました。そして難解だつた經論も易々と味讀させて頂き、その盡きぬ醍醐味を渴仰申しつつあるのであります。

省みれば幾十年、自力を励まして佛陀を求め、自已安心の具に供せんと功利的且つ憍慢至極な頂上にあつて、然も自らこれを知らず幾多の善知識を苦しめ、飽くまで自力を振りかざしていた極悪の身を、その故にこそいよ〳〵悲懇限りなく終に仰信せしめ給うた佛陀憶々の大悲に五体投地、慚愧感謝の外ありません。

私は当年八十三歳の高齢に達し、近くば二弟勝二を亡い先年勝三を喪い、更らに四弟勝源を先き立たせ孤影獨り秋燈の下にあつて無常の現実に轉々寂莫の情に耐えませんが、不思議にも獨り稱名のあらわれ來りて限りなく慰められつつ余生を送り得る光景に一老叟の心底はいつも春めき渡る單純な然し濃厚な法喜を惠まれて居ります

請われるがままに当市の信仰座談会にも出席し法緣を頂きつつ求道の友を惠まれて居ります。

臨終間近き母の病床にはべりて

竹内幸子

山下先生、昨二日は有り難うございました。いつもいつも御手厚き佛様の御眞實を承り只々御慈悲に腹ふくらせて頂くばかりです。實は翌三日はからずも三和村の前山のおしゆうさんと云うおばあ様がたまたま印判の注文に來られ、佛縁の深い前山の方と聞きこのおばあさんの御信仰はどうかなと、いささか主人久三の老婆心が動き、おばあさん、御安心は如何ですかとおたづねしたのがきつかけとなり、はい今はな重荷おろした様な氣持にて、うれしうれしのお念佛様だけです。私も二十才代から聞きましたが、六十過ぎまではどうもわからず、只明るうなりたい、はつきりしたい、御慈悲が頂きたい、とそればかりが苦になつていましたが、明るうもなれない、はつきりともなれない、落ちるより外に道がないと判つた時、はじめて佛様に助けられ、つかまえられて、やれやれうれしやと、苦抜けさせて頂いたのですとの事、誠に信味ゆたかな御よろこびの御様子に、しばし共々御慈悲を讃嘆させて頂きました。明るうなりたい、はつきりしたい、喜びたいと思う内はいただかれぬ證據、あくまで明るうなれない、はつきりもされない、喜べないと知れた時、間違いなく御助けに預れたのだ、明るうなりたいも、はつきりしたいも、喜びたいも、何の機の詮索もいらなんだ、この汚い、明るうもなれない、はつきりもせられない、喜べもせぬ、愚悪人をこそ第一の御正客とは、まあまあ何とした有り難い事かなと、今は重荷おろして安々御念佛のみですと、何度くりかえし聞いても有り難い御話でした。余りうまい御味わいなので病床の母にも一度会つて頂きたいと思い、直さま御伴して一時間ばかり御話して頂きました。誠に結構なお話でしたが、後から母は余りうまい御話だが私はどうもあんなに喜べないがの一との事、そこで私が歎異抄にも「喜ぶべきことを喜ばぬにていよ〳〵往生は一定」喜べる、喜べんは佛様の御目あてではない、喜べぬ奴をどこまでも捨ておけぬ、喜べぬ奴こそ尙更可哀相と思し召し下さるのだよと言いましたら、ああそうであつたの一と、又しても

あともどりあともどりして辿るらん
かいなきことに心迷いて

のお歌を泌み泌み味わして頂きました。

母の今の病狀では臨終も間もないでしようが、母は入信後二十余年をも經ていながらやはり最後の土壇場に來ると、正念の時はいよいよ今度はお淨土様へやつて頂けるかと思うとうれしいような氣がしての一と言われるかと思えば、曉方になつて何だかシクシク泣いて居られるので、淋しいかな、死にともないかなと聞いましたところ、かすかに肯かれたので、そうでしよう、死にともないでしよう

そのままお淨土様へ佛様につれて行つてもらうのだとよくよく信知していながら婆婆の未練は盡きがたく、お淨土様へはいやいや後むきで佛様につかまれてつれて行かれるのだと、つくづくとどこ迄も煩惱具足の凡夫なるものと目のあたり見せつけられ、歎異抄第九章「いそぎ淨土へまいりたき心なきものを殊にあわれみ給うなり」又「名残おしく思へども婆婆の縁つきて力なくしてをはる時にかの土へはまいるべきなり」の全句を母にしみじみ話し、どこまでも煩惱具足の私を救済せずには捨ておけぬとの如來召喚の勅命を共に共に喜ばせて頂いた次第でございます。幸にして母ももう何一つ思う事はない、只々南無阿彌陀佛一つだと言うて喜ばれました。然しながら道々病の重るにつけ、お念佛も出ぬと又も訴えられますので、お念佛の出る出ぬが問題ではない、佛様は重病の時お念佛稱えよと仰言る様な無理な事を注文さるる佛様ではない、念佛申そうにも申されぬお前の業苦が可哀想と、どこ迄もお前の苦しい心のすみずみ迄も察知して下さるのだ、信の一念に即得往生である御稱名出來る、出來ぬが往生のたすけさわりになるのではない、只佛様に助けられるのだと信知し、うれしやありがたやと思うたけで御助けに間違いはないのだからと、繰り返し繰り返し話しましたところ、今はもう何の心配もなく、懸念もなく、心朗らかになられしように見受けられ、共に俱に大悲を喜ばして頂いた様な次第です。かえすがえすも子供として母との別離は悲しい極みです。

明日の夜は照りますものと知りながら
入るさの月の惜しくもあるかな

何れは淨土に再会が出來、又母が還相回向して下さると思い返して見ても、實に名残おしき極みでございます。

ここに母の近況を記し。永年御養育にあづかりし先生はじめ有縁の皆々様に最後の御禮を申上げる次第でございます。

曇鸞和尙の碑文

法師常に淨土を修す。亦毎に世俗の君子あつて、來つて法師を呵して曰く。十方佛國皆淨土なり、法師何すれぞ乃ち獨り意を西方に注ぐや、豈偏見の生するにやと。法師こたえて曰く。吾すでに凡夫にして智慧淺短なり、未だ地位（菩薩の歡喜地の位なり）に入らざれば念力均しからず。草を置きて牛を引き恒に心を槽櫪にかけしむが如し。豈縱放にせば帰する所を全く失うに必せり云々。

註　道綽禪師、この碑文を拜して忽ち涅槃の廣業を捨て、念佛門、淨土の一門に皈し給えり。

あとがき

▲正信偈意譯は白井先生に特にお願い申しましたところ、快く御承諾を頂き、本誌に記載させて頂きました。承りますと先年御病臥中に御起草下さつたもので、一字一句まめやかに、つやつやしく、慈悲のあふれる御意譯であります。御味讀を願います。

思うに聖典意譯は至難な仕事であります。文字通りの解釋は誰にでも出來ることでありますが、それでは花を寫眞に撮つただけで花の持つ香氣と密がありませんから蝶も蜂も見向きもしませぬ。これが今迄澤山の意譯聖典が出版されながらも世間に流布されない根本の原因です。意譯は單に現代語に寫すことではないのです。花で申せば現代に移植するのです。即ち聖典の內容を執筆者が自ら體解されて、そこから自然に湧き出たもの、佛意に催された生きた言葉でなければなりません。然もそれを先生が御病床にあられてよくも香高き言葉を音律の妙に織りなして書き上げて下されたことよと感謝に堪えぬことであります。御住所は廣島縣坂局區內橫濱です。

▲丸尾猪太郎氏は目下、香川縣多度津町家中に住まれ、近角先生の御慈育を久しい間おうけになつた方で、本稿は常觀先生の眞面目の一端に直接おあい出來る有難い原稿であります。

明師に遭いまつることは、盲龜の浮木にあうに等しい、稀なそしてかけがえのない幸慶であります。またそうした方々から承つて耳の底に幾年も幾十年も殘る金言こそは歎異抄中聖人の金言に接する思いのするものであります。

▲解信より仰信への經路は出淵勝郎翁の慘怛たる求道の實錄であります。論語讀みの論語知らずと昔から言うが、佛法に於いて一應理解は出來乍らわかつてわからぬところが殘り、其疑團に五里霧中の彷徨が續けられるものです。聖人はこれを「疑情」と呼ばれ、佛智疑惑とも訓えられている。十室の宮殿に金鎖をもつて縛られる者に喩えられてある。ここに斉清して愈々知目行足の缺けた三世流轉の身を知らされると共に、彌陀佛の本願はここにましますと知らされそのであります。千尋の崖におつる身を忘れて、唯一無二の救濟の綱、南無阿彌陀佛に氣づかないものであります。出淵氏の御住所は森岡市榮園です。

▲竹內幸子さんは厚信家竹內久三氏夫人ですが、目下久三氏は昨年春から中風症で靜養中、加えて本稿にありますように御實家の母堂の重患、その間に處されて信味豐かな原稿を送つて下さいました。歎異抄九條の後半を目のあたり實驗せしめられる原稿であります。「久遠却より流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れざる安養の淨土はこいしからず候こと、よく〳〵煩惱の興盛に候にこそ、名殘り惜しく思えども娑婆の緣つきて力なくして終るとき彼土へはまいるべきなり、急きまいりたき心なきものを」、ことに憐れみ給うなり」ここ一つであります。竹內さんの御住所は愛知縣知多郡大野町であります。

（花田記）

慈光第二卷第三號　昭和二十五年三月十五日發行　（毎月一回十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

昭和二十五年三月十日印刷
昭和二十五年三月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價　一部金拾五圓（郵稅共）
一年分金百八拾圓（郵稅共）

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九
編集兼發行人　花田あや
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人　本伍郎
名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所
名古屋市昭和局區內幸樂町二ノ二九、
花田正夫方
發行所　慈光社
振替口座番號　名古屋一〇四七〇番